

## 論文

## 現代の若者たちの人間関係

木村 晶子\*

## はじめに

近年、若者たちのコミュニケーションというと、ほとんどが SNS でのやりとりである。すぐ隣の友人にさえ、メールで交換したり、家族内でもスマホで連絡をしたりと、2000年依然では想像もつかなかったコミュニケーション手段となっている。便利なこともあるが、そういった手段によるさまざまな弊害も起き、人間関係も大きく変化していることに気付く。一体、現代の若者たちはどのような人間関係を目指し、どのようなことに満足を求めているのだろうか。

また、昨年12月、広島県府中町の町立府中緑ヶ丘中学校で、3年生の男子生徒が、教員に万引きしたと誤解され、志望高への推薦が叶わず、自殺した問題は、大きな問題となっている。教師に責任があるのは当然のことだが、男子生徒は自分が何もしていないなら、なぜ「事実とは違う」・「自分はそんなことはしていない」と反発できなかったのだろうか。さらに、なぜ教師に問われたことをすぐ両親に伝え、教師に「そのような事実はない」ということを強く主張できなかったのだろうか。

今回、このような疑問が湧き、現在の若者の心境の変化や行動には、私のような世代には理解できない複雑な思いがあるのではと考えた。また、学校における人間関係も大人が考えているよりももっと難しい関係になっているのではないかと思われる。そこで、本稿では若者の人間関係について検討してみることにした。

## 1. ヨコ社会における若者たちの不安

日本社会における人間関係のあり方を振り返ってみると、大きく変化してきたことがわかる。1960年代から近年までの社会の変化に伴って、人間関係もかなり変化してきている。1960年代は自分の努力によって上の地位に上っていけると、競争に勝つためひたすら頑張る若者の姿が見られた。このような努力を第一とする傾向は1980年代まで続いた。そして、この時代の人間関係の悩みは、タテ社会の制度に縛られた窮屈さと、その中における気遣いであった。

社会学者の見田宗介によると、1960年代初頭に地方から東京に出てきた若者の調査結果では、当時の悩みの第一位は、友人や仲間が見つからないことではなく、むしろ一人になれる時間や場所がないことだった。彼らは、今のような濃密な人間関係を求めていたのではなく、制度に縛られた濃密な関係を嫌悪していた。だから、一人でも生きられる人は「一匹狼」として憧憬のまなざしで見られたのである。そしてそれは集団のしがらみからの解放を意味していた。<sup>1</sup>

この傾向は1980年代まで続き、多くの若者たちは伝統的なものや制約のあるものを鬱

---

\* 人間生活学部人間生活学科教授

陶しく思い、そこから逃れたいという欲求が強く、外界をシャットアウトしたいと思っていた。もちろん親しい相手を望むこともあったが、ごく限られた特定の相手とのみ、いろいろなものを共有していた。<sup>2</sup>

ところが、2000年以降から現在にかけて、タテ関係が重視された社会からヨコ関係重視の社会へと変化してきている。タテ関係社会では、上下の関係への気遣いに神経をすり減らしてきたが、ヨコ関係の社会となると、お互いにフラットな関係になり、嫌な相手との無理な関係はもたなくてもよくなってきた。既存の制度や組織に縛られない人間関係づくりが広がり、不本意な相手との関係へ無理矢理縛られることが減ったのである。<sup>3</sup>

このような状況下では、若者は一人になれる環境はすでに最初から用意されており、自由度は高い。バスの中で平気で化粧をしたり、地下鉄のホームで制服から私服に着替えたりする。「公共」という世界は彼らには「無縁」であり、そもそも「眼中にない」のであろう。30歳を過ぎて独身でも、世間から指をさされるようなことはほとんどない。どのような生き方をしようが誰も干渉せず、自由度が増した社会となった。

ところが、2000年以前は、好景気ということもあり人間関係や人生に対する満足度は増え、悩みや心配ごとを感じる人も減る傾向にあったのだが、2000年以降、その傾向は反転し、友人や仲間に悩みや心配を感じる人が増え始めたのである。<sup>4</sup> 社会の流動化が急激に進み、逆に「無縁化」が不安の原因となっているのである。<sup>5</sup>

こういう社会だからこそ、つねに誰かとつながっていなければ不安になってしまうのだ。そして、それができないと自分は価値のない人間だと周囲から思われまいかと絶えず他者の目を気にし、他者の目に怯えている。そのため一人では生きにくい時代になっている。

したがって、いつも誰かとつながっているための手段として、ネットや SNS を利用するのだが、このネットを介したコミュニケーションの主たる目的は、何か特定の要件を相手に伝えることではなく、互いに触れ合うことにあるのである。

学校での人間関係に恵まれない子供たちがネットを駆使して代替の人間関係を探し、そのバーチャルな相手からの反応を過剰に気にかけるのは、リアルな関係から疎外されている欠落感をネットで埋め合わせるためである。<sup>6</sup> しかし、不安解消のためのネットや SNS は逆に不安の増大にもなっていくのであり、同時にネット上の関係にも負担を感じ、矛盾をはらんだ状態となっているのである。

実際、年齢が上昇するにつれて、ケータイとスマホの使用時間がふえている。そのなかでも13歳と16歳に山がある。前者は「中学デビュー」、後者は「高校デビュー」にあたる年齢である。どちらも学校での人間関係が流動的なので互いにモバイル機器を駆使して友達の獲得競争に励まざるをえない。現実の人間関係とは別の世界がネット上に構築されているのではなく、むしろ現実の人間関係がネットまで拡張されているのだ。<sup>7</sup>

タテ社会の制度的な枠組みが人間関係をかつてのように強力に拘束しなくなったということは、裏を返せば、制度的な枠組みが人間関係を保証してくれる基盤ではなくなり、それだけ関係が不安定になってきたことを意味する。既存の制度や組織に縛られることなく、付き合う相手を勝手に選べる自由は、自分だけでなく相手も持っている。だから、その自由度の高まりは、自分が相手から選んでもらえないかもしれないリスクの高まりとセットなのである。<sup>8</sup>

親子関係も、タテの関係からヨコの関係になっていけば、たしかに風通しもよく居心地のよい家庭になるかもしれないが、親子関係がフラットになるということは、子どもの側

からすると親に一方的に身を任せられず、すべてを頼り切ることができない。親にも打ち明けやすくはなっているのだろうが、何でも打ち明けられるようになったわけではない。親子関係が友達関係に近づくにつれてリスクをはらんだ関係になり、安心して本音をさらけ出せるわけではない。<sup>10</sup>

友達関係も同じで、相手の期待に沿い、気に入られるような人間でなければ自分を愛してもらえないという不安をもっている。友達は悩みを共感しあえる相手だが、同時にリスクをはらんだ関係にもなっている。そのためおいそれと本音を打ち明けて、互いの関係を傷つけてはまずいと相互に気遣いをしなくてはならない。したがって、先輩や後輩との関係に対しては、さほど疲れやストレスを感じていないのに対して、ヨコの人間関係のほうが、はるかに大きなストレス源となっているのだ。女子高校生でストレスとしてもっとも多いのは同級生との人間関係で、勉強を凌ぐ多さとなっている。<sup>11</sup>

若い人たちは、グループ内で互いのキャラが似通ったものになって重なりあうことを、「キャラがかぶる」と称して慎重に避けようとする。グループ内での自分の居場所を危険にさらすからだ。同時に、どれだけ強い個性の持ち主であろうと、集団内であらかじめ配分されているキャラからはみ出すことも、また同様に忌避される。全体の構図のなかうまく収まらないと、やはり自分の居場所が危険にさらされるからである。<sup>12</sup> 演じられるキャラとは、各自が勝手に定めることができるものではなく、周囲との関係で決まってくるものなのである。しばしば自分の個性の表現のように思われたりもするが、「キャラかぶり」をさけるためには、自分のキャラを自分で勝手に決めることはできないのである。このように、キャラ化された人間関係では、その安定感が確保されやすいのとは裏腹に、そこに居るのが他ならぬ自分自身だという確信が揺らぎやすくなる。いわゆる「キャラ疲れ」の根底にじつはこのような不安が潜んでいるのである。<sup>13</sup>

それゆえ、多くの友人を持ち満足感が上昇しながらも、また同時に不安感も募ってゆく。関係を保証してくれる安定した基盤がないので、互いにいつそう不安な状態へのめり込んでゆくのである。<sup>14</sup>

## 2. 絶え間ない承認願望

ネットでつながっていないと不安であるという心のうちとともに、ネットを駆使するもう一つの理由がある。それは承認願望の強さである。自分のいる環境を安全に保つためには多くの承認が必要であり、それによって自分自身も安心を得られるような手段をとっているのである。

現代の価値観が多様化した世の中で、制度に縛られない自由な人間関係を営めるなら、そこで互いの異なった価値観が衝突しあい、軋轢や争いが増える可能性が強くなりそうだと思う。ところが現実にはそうはなっていない。不思議なことに、多様性は対立を避け、相互の違いを認めようとする方向に作用している。今日の子供たちはがむしゃらに主張を押し通そうとはせず、互いに譲り合うようになっている。これは平和的で望ましい多様化のあり方が進んでいると評価することもできるが、一方で、互いの内面にあまり深入りしなくなったと捉えることもできる。その背後にあるのは、承認願望の強さである。たえまなく承認を受けつづけるためには、つねに衝突を回避しておかなければならないからである。そのため、互いに相手を傷つけないように慎重にならざるをえない。<sup>15</sup> このように、相補関係を傷つけるような対立は、表面化しないように慎重に回避されている。若

者たちが求めているのは、摩擦のないフラットな関係なのである。<sup>16</sup>

親子間も同じことで、親も子もともに絶え間なく承認を受けつづけたいと強く願うようになってきている。しかし、ここにも大きな落とし穴がある。互いに承認しあうことばかりに気を取られ、本音で話すとか、本当の気持ちを伝えられなくなっているのである。つまり、互いの内面に立ち入らない表層的な付き合いになってしまっているのだ。

だが、自分と対等な他者からの承認には絶対的な安定感がなく、充足感を覚えることも難しい。そんな相手から与えられる承認だから、その程度の重さしか感じられないのだ。他方、たとえ対等な他者からの承認であっても、互いに内面を理解しあい、心から尊敬できる相手が与えてくれた承認であれば、そこには自己肯定感の確実な基盤となりうるだけの重さがあるはずだ。そんな相手であれば、円滑な関係を維持していくために、常時接続している必要はない。こういった関係は壊れる心配がない。

親子関係が一見うまくいっているように見え、実際問題が起きた時にうまく解決できないのは、こうした関係のあやうさにあると言える。はっきり言えば、親の「権威」、親の「自信」が薄れてきているのである。したがって、親子双方とも、ぶつかり合うこともなく、信頼して任せることもできなくなっているのである。

友人関係をみても、最近の傾向として、「遊ぶ内容によって友達を使い分けている」と回答したこどもは増え、反対に「親友と真剣に話ができる」と答えた子供は減っている。同様に、「親友とケンカをしても仲直りできる」と答えた子どもも、「自分の弱みをさらけ出せる」と答えた子どもも減っている。また、「意見が合わなかったときには納得がいくまで話し合いをする」と答えた子どもも減少しており、反対に「あっさりして互いに深入りしない」と答えた子どもが増えている。このような傾向は、友人を増やして多くの承認を得ようとする先の態度と矛盾した行動のようにもみえるが、背後にある心性は同じである。一方は少しでも多くの承認を得るためであり、他方は少しでも安定した承認を得るためだからだ。

統計数理研究所の「日本人の国民性調査」によると、「自分が正しいと思えば、それを押し通すべきだ」と考える日本人は、1960年代までは40%を超えていたが、その後は徐々に減少し、2000年を超えてからは約20%になっている。自分の生き方を模索していかなければならない若年層にとって、仲間からの評価は大人以上の重要性をもっている。「どんな場合でも自分を貫くことが大切だ」と回答する人はますます減少している。<sup>17</sup>

もともと国民の半数以上の人々は、人の目を気にし、周囲の反応を気にかけてそれに従うことが多かった。これは、日本は島国で、集団主義的であり、世間の反応を気にする国民と言われてきた所以である。しかし、今日ほど周囲の反応に敏感になる必要はなかった。当時は人々の価値観がまだ同質的で、周囲からの反応にも一貫性があったからである。ところが、今日では、価値観も多様化しているため、他者からの評価もまちまちであり、自己評価も割れやすくなってきたのである。<sup>18</sup>

昨今の若者やこどもたちが、友達からの反応を常に気にかけ、そのためのネットを駆使せざるをえないのは、このような事態が進行しているからだ。「神が絶対的な評価基準として君臨する一神教の国でもなく、また世間からの評価も安定性と一元性を失った現在の日本では、自分を評価してくれる仲間の存在が自尊感情を支える最大の基盤であり、またその仲間からの反応が自らの態度決定に有効な羅針盤であると感じられるようになってきている。したがって、その関係が損なわれることに強い不安を覚え、ネットを介した常時接続から

も離れにくい」という土井のコメントは、SNS中毒の実態をよく表している。<sup>19</sup>

さらに「子どもたちの承認願望について考えるとき、ここには非常に重要な問題が潜んでいる」と土井は指摘する。親子関係がフラットになり、関係が良好になったのであれば、子供たちの承認願望を満たしやすくなったと思いがちだが、その一方では、承認の重さが圧倒的に軽くなってしまふ。承認の重さは、自分と対等なものではなく、自分より大きな存在、権威ある存在の承認の方が絶対的なものであり、安心感も得やすい。しかし、親子関係も友達関係のようになると、承認の安全性は危うくなってしまふ。これは、教師と生徒の関係においても同じことである。教師との関係は緊張したり、嫌な関係というよりは、友達感覚で付き合えるようになってきているものの、それは同時に教師から与えられる承認がそれだけ重さを失ってきたということになる。そして、このような関係は友人同士にも当てはまる。誰から承認を得られたとしても、それがフラットな相手からのものであるかぎり、究極のお墨付き・充足感を得ることはできない。こうして他者から承認されている実感が薄くなった分だけ、数量で補わなければ、安心感を得ることが難しくなっている。<sup>20</sup>

このように、いつも同質な仲間だけと付き合っていると、いざ自分がうけ入れがたい存在になってしまったとき、その自分は仲間からも受け入れがたい存在とみなされ、圏外化の対象にされてしまふ。仲間は自分の分身と同じであり、同質な人間関係だけを増やしても、いざというときのセーフティ・ネットにはならないのである。<sup>21</sup>

### 3. カースト化する人間関係

前節ではフラットな関係による生きにくさについて述べた。しかし、現実の学校生活でも、一般社会においても、さらに「人間の格差」という過酷な人間関係が見受けられるのである。学校においては通称「スクールカースト」と呼ばれるシステムが存在し、クラス内において「地位の格差」があり、格差グループが出来上がっているのである。ここではこの「格差」について述べていこう。

#### (1) スクールカーストの実態

「スクールカースト」とはどのような実態なのだろうか。

今日の中高生たちは「格が違う」「身分が違う」などと形容して、クラスでの上下関係に過剰なほど気を使い、交友関係を分断しあっているのである。「スクールカースト」とは、格にせよ、身分にせよ、会社での上司と部下や、学校での教師と生徒のような、社会的に付与された役割や立場の違いを指す言葉ではなく、人間の本質的な属性の違いを指すことばである。<sup>22</sup> そして、同じ学校にいたとしても、それぞれ仲の良いグループに分断されて、それぞれのグループの中で独自の価値観を形成し、別のグループの価値観には干渉しないのである。<sup>23</sup>

「スクールカースト」のシステムはすでに小学校からしかれているようである。この問題に詳しい鈴木翔によれば、小学校時点において、「地位」が低いと捉えられている児童はいじめの対象になる子、もしくは嫌われている子であり、一方「地位」が高いと捉えられている子は、みんなでする遊びのうまい子など、尊敬の対象になる特定の子である傾向にある。<sup>24</sup>

中学校・高校になると、個々の生徒が何らかのグループに所属し、それぞれのグループに名前をつけて、グループ間で「地位の差」を把握していることがわかる。そこでの「地

位の差」は「いじめ」として表現されることはなく、日常的な教室風景として語られていく傾向がある。<sup>25</sup> ここにこそ、「いじめ」とされない「スクールカースト」独特の問題がある。

ではグループ格差の実態はどのようなものだろうか。

学校によって名前の付け方はそれぞれ違うが、それぞれのグループに名前をつけて、グループごとに力関係を把握していることがわかる。上位グループの名前は、「ギャル」・「キャピ系」・「ヤンキー」・「清楚系」・「イケてるグループ」・「過激派」・「中心」などであり、中間層は「普通」・「地味」・「ちょい地味」、下位グループは「めっちゃ地味」・「イケてないグループ」・「穏健派」・「静か系」などである。<sup>26</sup> そして、どのグループにも入らない生徒は「最下層」と呼ばれ、一人ぼっちは厳しい環境におかれる。たとえクラスの外に友達があったとしても、クラスの中でグループに所属しないということは、彼らの価値観の中では、笑いの対象となるような見下された存在として認識されている。<sup>27</sup>

ある少年の話によると、キャッチボールのように上履きを投げ合って騒いでいる「イケてるグループ」が、最後に今までそれに参加していなかった「イケてないグループ」に向けて投げることによって、クラス全体の笑いを引き起こすのだそうだ。少年はそうしたことが「お決まりパターン」としてよく起こっていたと話す。そしてその「お決まりパターン」として存在する行為は「いじめではない」のだそうだ。こうして笑いをとる行為は「する側」と「される側」が「お決まりパターン」として承認されている様子から、ここでグループ間の力関係が決まっていることが理解される。<sup>28</sup>

女子生徒の場合は、次のような例が示されている。

「地位」の高い「清楚系」のグループに所属していたという少女Aが、あるとき「地位」の低い「めっちゃ地味」グループに属するB子に自分のプロフィール帳の記入を願った。すると、「めっちゃ地味」グループのB子は、「めっちゃ嬉しそうに」プロフィール帳に記入し、A子に渡した。すると「清楚系」のグループのA子は記入してもらった直後にB子の見ているところでそのページを破り捨てたのである。その行動はクラスの「みんなを和ませようとして」下位グループにとった行動だと思ったという。その時点では「かわいそう」という思いはなく、地位が高いグループがとった行動だからそういうことは普通だという認識だったそうである。<sup>29</sup>

これは「理不尽」と思われるが、生徒間では「いじめ」とは受け取られていないらしい。

彼らのインタビューデータを見てみると、そのグループの中だけで活動できているときには、何も問題は感じておらず、むしろそのグループ内にいることに満足している。たとえ下位のグループであったとしても、同じグループ内の友人とともに過ごすこと自体は楽しいと感じている。<sup>30</sup>

では、何が「スクールカースト」の上位・下位を決めるものになっているのだろうか。

第一に、「スクールカースト」の地位が上位であるほど、「自分の意見を押し通す」ことができる。「スクールカースト」により、コミュニケーションのあり方に違いがあるのは、「意見を押し通す」ことであり、「友だちの意見に合わせる」ことではない。<sup>31</sup>

教師たちは、「スクールカースト」はコミュニケーション能力によって決まると考えているようだが、実はそうではなく、何らかの理由から「自分の意見を押し通す」ことができる生徒がコミュニケーション能力があると勘違いしている可能性がある。

第二に、所属するグループの「地位」によって、与えられている権利の数が違うのであ

る。<sup>32</sup> まず、下のグループには騒ぐとか、楽しくする権利が与えられていないので、「下」のグループなのに廊下で笑ったりしてはいけない。「うるさいな」と思うことがあっても言葉に出すことはできず、「下」にそういった異議を唱える権利は与えられていないのだ。「上」のランクならば、廊下で騒いでも良い権利、先生に突然授業中に話かけても良い権利が与えられているという。<sup>33</sup> さらに、もし面倒なら学校行事に参加しなくても良い権利や、行事の準備もしないで勝手に帰ってもよい権利、ほかの生徒に、自分たちがやりたくないことを強いてもいい権利などがあるという。<sup>34</sup> このような理不尽な状況でも、「下」の生徒たちは「上」の生徒たちに文句を言える権利が与えられていない。

こうして、グループの「ランク」はその「ランク」ごとに与えられるとされる「権利の数」を所有しているのである。

さらに、上位グループの特徴として挙げられることがある。

- にぎやかで、声が大きく、遠足などの行事の際に、バスで後ろの席を占領する
- たいてい固定して、一番騒いでいる
- イケてるグループは最初から人気があり、アピールの仕方がうまい
- 先輩たちとわいわい楽しくつきあえる
- 気が強い（特に女子に見られる傾向）
- 「自己中」と思われることがあってもでしゃばる
- 自分の意見をはっきりと伝える。
- モテる（恋人がいる人と比例している）
- クラスを仕切る
- 女子の強い子はかわいいかかわいくないかは別として、努力をしている  
髪を染めている 制服もスカートは短く、好きなブランドを持っている
- バイトしている
- 学校活動や行事に積極的である
- ダンスやバンドなど音楽的なものに積極的である
- 容姿が良い
- 男子生徒の場合は、運動もできて、顔もカッコいい  
勉強はあまり関係ない

それに対して、「下位」グループの生徒たちは

- 地味で特徴がない
- 成績もあまりよくない
- 悪目立ちしないようにおとなしく黙っている

下位の生徒たちは、このように上位の生徒たちを目立たせる役目をもっていると言えよう。上位の生徒たちには逆らうことができず、良いイメージがなくても上位グループには近寄っていき、嫌っている素振りにはみせない。それは「とりあえず従わないとめんどくさい」からだそうだ。好きではないがとりあえず従うふりをするのだそうだ。<sup>35</sup> この「面倒くさい」という理由のほかに「恐怖心」もあるようだ。上位グループの生徒は気が強く、自己主張が強いので、言い返せないという力が働いている。<sup>36</sup>

このように、上位の生徒はクラスを牽引する力をもっているのだが、「クラスの方向性」を決めるという行為は、いわゆる学級委員長がするような、クラスをまとめるための行為とはかなり異なっている。

生徒へのインタビューによれば、

先生がウケねらいにきたら、「はあ〜？」とか言わなきゃいけないくて（笑）。

そういうこと言わなきゃ的な空気が教室にはあるんで（笑）。

言わなきゃ空気がよどんでしまうというか。<sup>37</sup>

というような答えがかえってきた。

このように、「上」の生徒には、クラス全体のウケをねらい、そういう役目をしなければならないという決まりがあるようだ。しかし、自分の気持ちと違って、人が求めるキャラを「演じる」ことが求められるため、下位の生徒のみならず、上位の生徒にとっても、学校生活を過ごすうえで、大きなストレスとなっているといえる。

以上のように、「スクールカースト」においては、上位・下位のグループ両者が「空気を読んで」行動する、いわば「維持のメカニズム」が働いている。<sup>38</sup>

そして、いくら努力しても自分の力では「地位」は変えられない。「スクールカースト」の地位は固定的で、クラス替えをしても大きな変化は起こらない。その理由は、すでにクラスを超えて情報（立ち位置）が漏れているので、自分の立ち位置を変えることはできないのである。いろいろな噂が耳に入ってくるので、すでに相互にどういう人なのかを知っているのである。したがって下がることはあっても上がることはない。まわりの生徒の受け入れの変化がない限り、下の子たちは上がれないのである。

スクールカーストは上位に属する生徒の行動により設定され、それ以外の生徒にはそういう権限が与えられておらず、下位の生徒にとって、「クラス」は非常に居づらい場となっている。<sup>39</sup>

さて、この「スクールカースト」のシステムに対して、教師たちはどのような態度をとっているのだろうか。

鈴木翔によれば、教師も「スクールカースト」を認識し、それを利用しているというのである。<sup>40</sup> それぞれの生徒が属するグループの力関係の強さによって、教師のコミュニケーションのとり方も異なっているのである。教師は、見た目、雰囲気などによって、あるいは学校活動に積極的かどうかなどによって、話し方を変えているのだそうだ。生徒たちへのインタビューからみえてくるのは、イケてるグループにはちょっかいをだしたり、上位グループやギャルにばかり話しかけている教師の姿である。<sup>41</sup> 教師も上のグループの方が「フレンドリー」で「扱いやすい」という思いに支配されている。

「下位」グループの生徒たちの教師に対する認識は次のようである。

「一番上のグループにしか話しかけないし、異様にベタベタしてくる。」

「地味なグループ」の存在を無視している。

「まずスカート短いのか注意しないですよ。見過ごしますよ。弱い教師はランクの高い子には脅されそうなので、何も言わない。だから、「普通」のグループの子にばかり注意する。」<sup>42</sup>

さらに、教師は「スクールカースト」を「能力」による序列だとみている傾向が強い。「上位」の生徒たちには積極性・生きる力・コミュニケーション能力・リーダー性があると思っているのである。このように、教師はスクールカーストを肯定的に捉えており、社会に出ていくことを考えれば、このシステムは望ましく、生徒の成長には役立つものと捉えているようである。<sup>43</sup> 教師からすると、話しやすい生徒は、コミュニケーション能力が高く、「良い生徒」・「扱いやすい生徒」に見えるのであろう。



しかし、実際は、生徒と教師の「スクールカースト」の認識は異なっている。

「スクールカースト」の上位にいる生徒が、支持されているように見えるのは、彼らの「結束力」や「影響力」を背景として形成される「権力」を恐れていることなのである。それゆえ、彼らが抱く嫌悪感をはっきりとは表出されず、彼らのいう「権力」が生徒に影響を及ぼしており、「おとなしく従わざるをえない」ためなのだ。<sup>44</sup> 一方、教師はこの「権力」を上位生徒の「能力」と勘違いしているのである。

この認識のずれにも、クラス経営上、大きな問題があると言える。学校生活の実態をみると、若者たちはこのような過酷な状況のなかに置かれ、多大なストレスを感じながら生きていることがわかる。

## (2) 社会におけるカースト

前節では学校におけるカーストについてみてきたが、一般社会においてもカーストは見られ、それが原因で事件を起こすことにもつながっているのではないと思われる。

2008年6月の東京秋葉原で、17人無差別連続殺傷事件があった。犯人のK青年は、ネットに次のように書き込んでいる。<sup>45</sup>

「一人で寝る寂しさはお前らにはわからないだろうな」

「ものすごい不安」

「彼女いる奴にも彼女いない時期があったはずなのに、みんな忘れちゃってるんだよね」

「勝ち組はみんな死んでしまえ」

彼の発言から、彼にとっての「勝ち組」とは充実した人間関係を生きる人々だったことがわかる。彼が一番問題としていたのは人間関係の格差なのである。ここから彼の雇用に対する不安と格差への怒りが読み取れる。

おそらく、K青年は世界から自分が圏外に消されてしまったかのような感覚にとらわれ、その自分の存在を訴えるために、あのように衝撃的な事件を起こしたのではないだろうか。Kの犯行予告は、ネット上で注目を浴びることで、その存在感を獲得したいと望んでいたのではないだろうか。どうせ自滅するなら、たとえ一瞬でも周囲から注目を浴びることでその生の希薄さを帳消しにし、自らのキャラを際立たせたいという思いがあったのではないかと想像される。<sup>46</sup>

このように、学校以外に、社会においても、「格差」という実態は存在し、それに苦しむ若者が多くいる。犯罪は肯定できないが、さまざまな「人間格差」という状況が犯罪を生むひとつの原因になっているように思える。

## 4. コミュニケーション偏重の時代

近年、学校でも一般社会でも、「コミュニケーション能力」ということばが毎日のように聞かれる。このことばの仕様回数が急激に増えるのは2004年からだという。これは日本の失業率が急激に悪化した時期と重なる。また、日本経団連の「新卒採用に関するアンケート調査」で「コミュニケーション能力を重視する」と答える企業が急激に増え始めるのもこの頃だそうである。<sup>47</sup>

しかし、このコミュニケーション能力とは、「あうんの呼吸」であるとか、「以心伝心」といった相手の立場を読み取る能力というよりも、他者の反応によるものであり、つねに

他者との関係の総体である。つまり今日のコミュニケーション能力とは相手との関係しだいで高くも低くもなり、個人に内在する能力ではないのである。<sup>48</sup> そして、自分だけが目立ちすぎないように場の空気を的確に読み取り、相手の態度や意見を絶えず気にしながら、そこに合わせていける人物こそ魅力的と思われている。

母親へのアンケート調査でも「リーダーシップのある人になってほしい」と答えた母親の数は最下位であった。子どもにとって集団の中で目立つことは非常にリスクなことであり、できるだけ回避すべきことでなのである。<sup>49</sup>

したがって、人生観も努力によって切り開いてゆくというより、運やコネなどの宿命論的な要因に依るといった考え方が強まっている。こうした社会の風潮が実は子どもたちにも大きな影響を与えており、学業成績が優秀であることよりも、多くの良い友達をもち、良い人間関係を築くことこそ幸せの条件であり、成功の一步となると考え、学校での人間関係に過剰に気を使っているのである。こういう状況では、いわゆる場を盛り上げる能力に長け、対人関係を器用にこなせる子どもと、そういった社交術に疎く、関係づくりが苦手な子どもとの間で、かつて以上に人間関係の格差が生じやすくなっている。<sup>50</sup> 格差が歴然と目につくようになると、友人の数が多いか少ないかによって、人間としての価値が測られるかのような感覚が広がっていく。つまり、友人数が多いほど自己肯定感も高く、自分の将来も明るいと考える傾向にある。ここに、今日の子どもの間でコミュニケーション能力が偏重されるもう一つの理由があるのである。<sup>51</sup> 付き合う相手を自由に選べる環境では、付き合う相手のいないことが、自分の価値のなさの反映と受け取られてしまいがちである。自身が向けるまなざしだけでなく、他者から注がれるまなざしにも怯え、高いコミュニケーション能力を有することが人間としての価値を決めるかのような錯覚が広まっている。<sup>52</sup>

かつては強制された関係に縛られない「一匹狼」に憧れたのだが、今日の子どもたちは、一人でいる人間を「ぼっち」と蔑むようになっていく。一人でいることは関係からの解放ではなく、むしろ疎外を意味する。一人でいる人はコミュニケーション能力を欠いた人物とみなされ、否定的に捉えられてしまう。逆にいえば、友人がたくさんいるという事実こそが、高いコミュニケーション能力の証拠とされるのである。前述の「スクールカースト」においては、「自己主張の強い」生徒が、コミュニケーション能力が高いと勘違いされていることがわかる。

しかし、本当のコミュニケーション能力とはこういった人間関係で測られるものではない。まわりに流されない自己を持ち、自分の意見をはっきりと告げることのできる能力と判断力を持っていることだと思われるが、今日の若者たちにはマイナスの態度ととられてしまうのであろう。

## 5. 結論

人々の価値観が多様化し、多様な生き方が認められるようになった今日の社会では、高感度の対人レーダーをつねに作動させて、場の空気を敏感に読み取り、自分に対する周囲の反応を探っていかなければ、自己肯定のための根拠を確認しづらくなっている。いわば内在化された「抽象的な他者」からの普遍的な物差しが作用しなくなっているために、その代替として身近にいる「具体的な他者」からの評価に依存するようになっていく。<sup>53</sup>

つまり、現在の日本では絶対的価値、基準となる絶対的物差しというものがなくなって

いる。したがってもっとも序列性が表面化しやすく、拘束力をもっているのがコミュニケーション能力となってしまうている。あらゆる価値が相対化されて、互いに異なった価値観をうまく調整しあうために、そして対立や衝突をさけるためにコミュニケーション能力だけが絶対的な優位性をもち、人々を序列化するようになったのである。<sup>54</sup>

残念ながら、現代の若者たちは確固たる自分をもつことができず、自信も持てないでいると言えるのではないだろうか。制度による縛りもなく、自由に生きられる環境になったからこそ見えてきた人間関係の難しさ、ヨコ関係から起こる絶え間ない不安、人間格差などのストレスに向き合わなければならない現代の若者が、生きがいや幸福感、未来への希望を見出すのは自分自身が感じているより、難しい目標となっているようである。

冒頭に挙げた広島の中3男子生徒が、なぜ自殺という結論に至ったのかは、こうした一連の困難が重なり合っているように思われる。さらに、次のことばからも彼の心情が読み取れるように思われる。

言えないです・・・「イジメられてる」なんてやっぱり・・・言いづらいです・・・

(中略) イジメられるような自分が情けなく思えてきて

それをお母さんに知られたのが恥ずかしくて

もし そんな自分が嫌われたらどうしようと考えたら 怖くて 怖くて

そんな自分を知られたくなくて 必死に虚勢を張って 隠そうとして

そんな自分が もっと情けなくて 恥ずかしくて

(高屋奈月 『フルーツバスケット』第5巻、白泉社2000年、88～90頁)

この件では、イジメではないが、先生に万引きを犯したと思われる自分が恥ずかしく、両親にもそういった自分を知られたくないという心情が働いたのではないだろうか。親子関係がフラットであるからこそ、安心して打ち明けることができないという子どもの心のうちを知るならば、なぜ自殺という手段をとってしまったかのかが理解できる。

そして、自分の努力次第で道を切り開くことができると思えなくなっていることが、この男子中学生を含め、未来をふさいでしまっているように思える。

これからの日本の学校教育において、あるいは社会において、若者たちが自己をしっかりと確立し、自分の中に確固たる信念を持てるように、大人たちが導いてゆくことが必要とされよう。

## 脚注

1 土井隆義 『つながりを煽られる子どもたち』、岩波ブックレット No.903、岩波書店、2014年、p.37.

2 同上書、p.38.

3 同上書、p.10.

4 同上書、p.12.

5 同上書、p.38.

6 同上書、p.17.

7 同上書、pp.18-19.

8 同上書、p.13.

- 
- 9 確かに統計上では、家のなかでの居心地の良い場所が今と答える子供が増え、1997年には56%だったのに対し、2012年には76%に増えている。
- 10 土井隆義 『つながりを煽られる子どもたち』、p.57.
- 11 同上書、p.11
- 12 土井隆義 『キャラ化する/される子どもたち』、岩波ブックレット No.759、岩波書店、2009年、p.11.
- 13 土井隆義 『つながりを煽られる子どもたち』、pp.76-77.
- 14 同上書、p.13.
- 15 同上書、pp.62-63.
- 16 土井隆義はこのような関係を「優しい関係」と呼んでいる。
- 17 土井隆義 『つながりを煽られる子どもたち』、p.50.
- 18 同上。
- 19 同上。
- 20 同上書、pp.55-56.
- 21 土井隆義 『キャラ化する/される子どもたち』、p.59
- 22 同上書、p.36.
- 23 鈴木翔 『教室内キャスト』、光文社新書 616、2012年、p.79.
- 24 同上書、p.95.
- 25 同上書、p.102.
- 26 同上書、p.100.
- 27 同上書、p.116.
- 28 同上書、p.104.
- 29 同上書、pp.106-107.
- 30 同上書、p.124.
- 31 同上書、pp.130-131.
- 32 同上書、p.132.
- 33 同上書、p.133.
- 34 同上書、pp.133-134.
- 35 同上書、p.176.
- 36 同上書、p.180.
- 37 同上書、p.138.
- 38 同上書、p.141.
- 39 同上書、p.201.
- 40 同上書、p.205.
- 41 同上書、p.206.
- 42 同上書、p.209
- 43 同上書、pp.264-265.
- 44 同上書、p.270.
- 45 土井隆義 『キャラ化する/される子どもたち』、p.5.
- 46 土井隆義 『キャラ化する/される子どもたち』、p.8.
- 47 土井隆義 『つながりを煽られる子どもたち』、p.29.
- 48 同上書、pp.29-30.
- 49 土井隆義 『キャラ化する/される子どもたち』、p.33.
- 50 土井隆義 『つながりを煽られる子どもたち』、p.36.
- 51 同上。
- 52 同上書、p.37.
- 53 土井隆義 『キャラ化する/される子どもたち』、p.16.
- 54 同上書、p.18.